紛争終結後における言語の再建と自己再定置
―コンゴ民主共和国東部のニンドゥの奮闘から―

山　田　孝　子

コンゴ民主共和国東部では，ルワンダの虐殺以降，第1次コンゴ戦争，第2次コンゴ戦争と紛争が長期間継続し，多くの地域住民が村を追われて国内避難民／難民生活を余儀なくされてきた。本稿では，紛争終結後に村に戻ることができたニンドゥのミクロヒストリーを事例に，彼らのNPOを組織しての言語の再建活動をとおした国際NPOとの連繋，民族性の再確認という自己再定置を明らかにし，多民族国家における民族性と民族語保持への戦略的希求を指摘する。

は　じ　め　に

2020年にはじまったCOVIDウイルス感染症のパンデミックが収束しないなか，2022年2月24日には，ロシア軍によるウクライナ南部の黒海に面した港湾都市オデッサや東部ドネツク州マリウポリへの上陸と全面侵攻の開始をみることになった。ロシアとウクライナとの停戦協定という解決を見通せないなか，2024年に入っても終結をみることなく，「戦争」状態は継続の様相を示している。「現代の戦争というのは，たとえ遠く離れた地域で行われていても，世界の衆人環視の下に展開されるということだ」と，福田充氏が述べるように[1)]，日本においても連日，新聞，テレビで戦況が報道され，その様子がまざまざと見せつけられる。武力による他国への侵攻や，政権による国内の反対派弾圧といった武力衝突は，これまでにも世界各地で起き，難民，国内避難民を産み出してきた歴史をみることができる。

たとえば，アフリカでは，1994年4月にルワンダで起きた100万人以上が虐殺されるという大規模なジェノサイドは世界中を震撼させたが，その後にはコンゴ民主共和国（以下コンゴと略す）東部では，85万人ものフツ系ルワンダ難民の流入が起き，「コンゴ・ザイール解放民主勢力連合」（AFDL）による第1次コンゴ戦争（～1998）が引き起こされた。さらにこの混乱は収束することなく，1998年には第2次コンゴ戦争（～2003年）へと展開したが，「世界最悪」といわれる紛争は2009年にひとまずの紛争終

結をみている。この紛争によりコンゴ東部地域では，1998 年からの 10 年間に暴力，病気，飢えなどによる死者数が 540 万人にのぼったといわれる（米川 2010）。

1990 年代半ばから約 15 年に及ぶ紛争状態のなかで，この地域にはこの長期間にわたって難民，国内避難民としての暮らしを余儀なくされてきた人々は少なくない。またこの間には，住民の大量虐殺が起きただけではなく，2018 年にノーベル平和賞を受賞したデニス・ムクウェゲ（Denis Mukwege）氏の性暴力根絶の活動（ムクウェゲ＆オーケルンド，2019；ミシェル，2015）が示すように，戦争のための一つの武器として女性に対する性暴力さえもまん延してきた。

著者にとってコンゴ東部地域は，1970 年代後半，1977 年 8 月中旬から 1978 年 3 月末にかけて大学院生として人類学のフィールド調査で訪れた土地である。当時はザイール共和国キヴ（Kivu）州（現在はコンゴ民主共和国南キヴ Sud-Kivu 州）であったルインディ（Lwindi）地方のキリンブウェ（Kilimbwe）村に暮らすニンドゥ（Nyindu）の人々とは生活を共にした懐かしい思い出がある。彼らも紛争が継続するなかで村を追われ，難民・国内避難民として生きざるを得なかった民族の一つとなった。

本稿では，ニンドゥのミクロヒストリー（cf. 王・山田　2023: 18-19）を事例に，紛争という政治情勢の経験と紛争終結後に直面したコミュニティ再建において，彼らが何を大切にして活動を進めてきたてきたのかを考えてみることにしたい。とくに著者が調査地としたキリンブウェ村の人々が積極的に取り組んできたニンドゥ文化遺産存続活動を取り上げ，彼らの民族としての文化遺産の再構築に向けての努力と奮闘，彼らの活動に対する国際的協力支援という今日の超域的・国際的連繋について考えてみる。

また，体制転換後の文化復興運動や越境先／移住先でのコミュニティ再建は，当事者集団の自己再定置と深く関わることをこれまでに指摘してきたところであるが（Yamada 2011a, 2011b，山田 2015），ニンドゥにとっても自己再定置はコミュニティの再活性化を進める上で重要な問題といえよう。本稿においても，国際的連繋のもとで進める言語・文化の再建活動において，ニンドゥがいかに自己再定置を計ってきたのかを明らかにし，多民族との共存が当たり前の社会生活において自らの民族的帰属意識と民族語の保持は戦略的に希求されうることを考察する。

1　ニンドゥの民族的・歴史的背景と言語

1977 年の調査当時，ニンドゥに関するまとまった民族誌的資料はなく，コンゴ東部

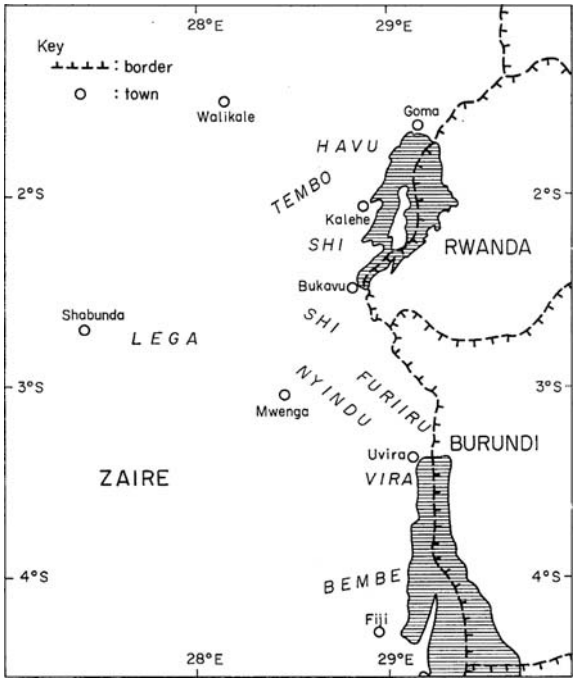
のバントゥ系諸民族に関する記述のなかでの言及が散見されるだけであった。後述するように，今日でもニンドゥの言語・文化に関するまとまった資料はわずかであるが，まず，諸文献資料と 1977 年の調査資料にもとづき，ニンドゥの言語・文化，民族的・歴史的背景について概観しておくことにしたい。

調査当時，ニンドゥの暮らす地域は，行政上，キヴ州ムウェンガ県（Zone de Mwenga）のルインディ郡（Collectivité de Luindi, Lwindi）であり，ウリンディ（Ulindi）川右岸地域にあたる。カシカ（Kasika）にはルインディ郡の中心地として郡役所が置かれていた。ウリンディ川の対岸地域にはレガ（Lega）の一支族レガ・ムウェンガ（Lega-Mwenga）が暮らし，北東にはシ（Shi），南にはベンベ（Bembe），そして南東にはヴィラ（Vira），フリイル（Furiiru）とバントゥ系諸族が暮らしていた（図 1）。

コンゴ東部では，ベルギー領コンゴ時代からキリスト教の布教活動が行われ，キリスト教徒のコミュニティが数多くある。南キヴ州では住民の多数がカトリック教徒であるといわれるが，ノルウェーのペンテコスタル派宣教団が約 100 年前から布教活動を行い，プロテスタントが根づいてきた地域もある（ムクウェゲ＆オーケルンド　2019: 59-61）。コンゴで布教活動を行ってきたプロテスタント宣教団には諸会派があり，1924 年には「コンゴ・プロテスタント協議会（Conseil Protestant du Congo, CPC）」が設立されるまでとなっていた[2)]。

カシカには, 1972 年にザビエル宣教会（Xaverian Missionary）[3)] によるカトリック・ミッションセンターが設けられており，調査当時，イタリア人神父がムウェンガ市から派遣されて常駐していた。また，カランビ（Kalambi）村にはプロテスタントの大きな教会があった。集中調査地としたキリンブウェ村の

図 1　1970 年代後半のザイール（コンゴ）東部におけるニンドゥと隣接諸民族



（Yamada 1984: 70）

住民はプロテスタント教徒であり，村の教会にはニンドゥの牧師が常駐し，村人は日曜日には身なりを整えて教会の礼拝に参加していた。

文献上でのニンドゥについての言及は，S・J・ヴァン・バルクがまとめたベルギー領コンゴの諸民族名・言語の綴り字研究において，「ムウェンガ地区に暮らすバントゥ諸語に属する Kinyindu を話す人々であり，一般に Nyindu と表記」と記すのをみることができる（van Bulck 1954: 32, 53, 88, 117）。民族名が Nyintu と表記されることもあったが，このころには民族名・民族語の一般的ローマ字表記はそれぞれ Nyindu, Kinyindu となっていたことが分かる。ヴァン・バルクはまた，ニンドゥ語をバントゥ諸語のなかで古バントウ諸語に属するレガ語とは異なり，シ語，フンデ（Hunde）語，ハヴ（Havu）語，テンボ（Tembo）語，ルワンダ・ウルンディ（Rwanda-Urundi）語などと同じ新バントウ諸語のキヴ湖グループに属するとする（van Bulck 1948: 256-257; 666-668）。ただし，J・ヴァンシーナがニンドゥ語をレガ語と同じマニエマグループに含めるというように（Vansina 1965: 106），当時はまだバントゥ諸語のなかでのニンドゥ語の位置づけは確定していなかった。

ニンドゥ語のバントゥ諸語での位置づけは 2000 年代に確定したということができる。2000 年代に入り，J・マホがバントゥ諸語に関する M・ガスリーの研究（Guthrie 1948, 1967-71）以降の進展（Nurse 1994-95; Vansina 1995）を精査し，ガスリーの言語参照体系の更新を試みており，このなかでニンドゥ語を，ベンベ・カブワリ（Bembe-Kabwari）グループのなかの湖間バントゥ語グループ（J）にも属する言語として D501（J）の参照記号で新たに追加している（Maho 2003: 644）。これによって，ニンドゥ語の湖間バントゥ語グループとしての位置づけが確定し，2009 年出版の *Ethnologue: Languages of the World*[4)] の第 16 版においても，ニンドゥ語は記載項目の一つとして取り上げられ，彼らの話し言葉にはレガ・ムウェンガ語とシ語の混淆がみられると付記される（Lewis 2009: 115, 695-696）。ベルギー領コンゴ時代に，ヴァン・バルクによって一つの民族集団として言及されたニンドゥは，湖間バントゥ諸族と近縁の独自の言語－ニンドゥ語－をもつ民族という一般的な認知を獲得したのである。

バントゥ諸語の分類は，湖間・大湖地域の植物栽培を営む農耕民が古くにアフリカ大陸西部から移住し，定住してきたという民族の大移動史を示すとされてきた。大移動以前のキヴ湖西岸地域の山地は，狩猟・採集を主生業とするピグミー系のバトゥワ（Batwa, Twa）[5)] が先住民として暮らす土地であったとされる。たとえば，ベルギー領コンゴ時代にカトリック宣教師として滞在したコール神父（R. P. Colle）[6)] は，バシの国に

おける諸クランの系譜伝承研究のなかで，バトゥワの先住性を次のように指摘する（Colle 1922: 6）。

「遠い時代には，ブシ[7]の土地はほとんど無人だったと言われてきた。森林に覆われたこの地域に住んでいた人はほとんどいなかった。記憶に残されている最初の人間は，カンジャとチレンゲと自称するピグミーであった。カンジャは，ピグミーの中で最も有名なムシンギの父親となるニャブホロ（Nyabuholo）をもうけた。・・・・・・・・

ムシンギの子孫である最初のサブ・クランが出てきて，ヴィルンガ火山の西にあるブフンデを占領した。・・・この同じ幹から生まれた他のピグミー・クランは，西部地域の森林帯，ブテンボやブベンベの土地に広がった。各氏族の長は小さな独立した王となり，共通の起源という唯一の関係によって他の氏族と結ばれていった。一緒になってバニェヒャ（Banyehya）またはバトゥワの部族を形成し，キヴ湖西岸地域すべてを占拠した。新たな侵略の圧力の下で，ピグミーは自分たちが「固執する主」となった森の茂みに後退しなければならなかった。」（下線は筆者による）

一方，A・モエラーは，ルアンダの支配一族に伝えられる伝承からまとめたベルギー領コンゴ東部におけるバントゥ系諸族の移住史，とくに支配一族・クランの移住史のなかで，次の点を明らかにする（Moeller 1936）。キヴ湖西側に分布するバントゥ諸族――バシ，バニントゥ（Banyintu）[8]，バリニ（Barinyi），バリンジャ（Balindja），バジバジバ（Bazibaziba）[9]，バハブ（Bahavu），バフレロ（Bafulero）――は，ウリンディ川水系におけるナ・ムカ（Na Muka）伝説によって見つかった神話上の祖先ナ・ルインディ（Na Luindi）を共通の起源とすることである。さらに，モエラーはルインディ地方への支配一族の移動・移住の歴史について次のように述べる。

「支配一族の起源には，キヴ湖の北東から来て，ウリンディ川の河岸まで侵入したおそらくワトゥジ（watuzi）血筋の征服者がいた。彼らはそこから北に引き返し，ワレガ（warega）やイトンブウェ（l'Itombwe）のバトゥワなどのいろいろな氏族を連れてやって来て，先住民バレガ（Balega）とおそらくバルング（Barungu）を，彼らの後からきて置き去りにした氏族の残党と同じように帰順させたのだ。」（Moeller 1936: 17）。（下線は筆者による）

また，モエラーはニンドゥの支配一族の起源について，次のような伝承も報告する。

「ナ・ムカ，カンゲレ（Kangere；後にナルウィンディ Nalwindi を名乗る），イトンブウェ洞窟出身のピグミーであるルアラ（Luala）の三人が起源である。ナ・ムカはワレガ（Warega）の首長ロンガンギのところのバシムウェンダ（Basimwenda）一族出身であり，バシムウェンダ一族の首長はナ・ムカ・ムボンドウェ（Mubondwe）の称号をもつ。ルアラはバシムキンジャ（Basimukindja）一族出身で，カンゲレはナルウィンディ同様バニントゥ（Banyintu）出身である。」（Moeller 1936: 117-118）。（下線は筆者による）

モエラーはこれらの起源伝承の分析をもとに，ニンドゥ王国では，①ニンドゥの間にワレガとバトゥワとの混血がいること，②カンゲレ（ナルウィンディ）出身の支配的なクランであるバトゥンバ（Batumba），イトンブウェの北東端から来たクランであるバムガンガ（Bamganga），イトンブウェの北東端から来たクランでバトゥワを自称するバリンシ（Balinsi），イトンブウェの北東端から来たクランであるバフムブウェ（Bafumbwe），バニャムウオチャ（Banyamwocha）部族出身のバフンダ（Bafunda）などのクランがいること，③イトンブウェからきた諸集団は土着の集団に同化させられた，と述べる（Moeller 1936: 120-121）。D・ビーバイックもまた，ニンドゥは，ムミンジャ（M’minja）とレンゲ（Lenge）を起源とするピグミー（バトゥワ）と混血した土着集団と，レガおよびフリイル，ヴィラの移住集団との混淆集団であり，レガ・クラスターに最も近い集団であると指摘する。さらに王国内はそれぞれの小領主国によって治められると述べる（Biebuyck 1973: 20-22）。

ニンドゥは 1976 年末当時の人口をみても 13,685 人というように小部族である。当時，ルインディ郡が 8 つの行政村に分かれるなかで，村のなかには 102 の小村に分かれるものもあったが，各行政村はニンドゥ王国時代からの小領主国に相当し，それぞれ自主独立した伝統的首長によって治められていた。集中調査地としたキリンブウェ村は人口約 330 人で，バランデ（Balande）クランの長が伝統的首長として束ねる村であり，首長が住む地区に住み込んだのであった。

フィールド調査中にも，「バトゥンバがこの Luindi 地域一帯のもともとの kabira（クラン）であり，バトゥンバ・クランの伝統的ムワミ（王）（Mwami ya asile）が昔からこの一帯の最初のムワミである。この子どもたちが①アングウェシュ（Angweshu），②カ

バレ（Kabare），③バリンジャ，④バニャルワンダ（Banyarwanda），⑤バムガンガそれぞれのムワミになった」と，長老が語っている[10]。一方，「バニンドゥはムワミをいただいて，このルインディ地方一帯に住んでいたが，争いが起きて，カバレ，アングウェシュ，ウヴィラ（Uvira），バニャルワンダ，キトゥトゥ（Kitutu）へと逃げていった人たちもいた。またバニンドゥの国にバレガが侵入して占領したこともあった」という語りも聞き込んだ[11]。

また，キリンブウェ村の人々のサブ・クラン名のなかに赤道バントゥ系であるレガと出自を共通にするものを認めることができた。さらにキリンブウェ村の首長の家には，バトゥワの狩猟法と共通するネット・ハンティング用の網があり，人々は網と槍を使った網猟や罠猟などの狩猟活動を積極的に行っていた。しかも，伝統的な特有の半球ドーム型の家屋が残されていたが，この家屋型式はバトゥワや湖間バントゥ系のルワンダ・ウガンダクラスターの部族に特有の家屋形式であった。村での生活文化にはバトゥワと共通する文化要素が混淆していたのであった（Yamada 1984；山田 1984）。

コールやモエラーの指摘するように（Colle 1937: 75-76; Moeller 1936），ニンドゥのエスノ・ヒストリーは，ルワンダ北部から民族移動を開始したツチ系集団が支配一族となり，キヴ湖西岸地域を通ってウリンディ川流域のルインディ地方に進出し，ニンドゥ王国を成立させたといえよう。また，支配一族の系譜は，ニンドゥがカバレ，アングウェシュ，ウヴィラ，バニャルワンダなどの近接する湖間バントゥ系グループとの類縁関係をもつことを示す。彼らの移動・進出過程では，先住民族であるバトゥワやワレガ，バントゥなどの土着の集団が帰順させられ，王国内に組み込まれてきたのであり，ニンドゥ王国はそれぞれの民族的背景が異なる小領主国からなる多民族混淆社会であったといえる。そのなかでキリンブウェ村はバトゥワを出自とするクランが優先する小領主国であったといえよう。

2　33 年後の邂逅から判明するニンドゥの苦境

2.1　思いがけないメールの受信

1977 年から 1978 年にかけてのフィールド調査のあと，コンゴ東部での調査は継続することなく過ぎてきたため，2010 年のニンドゥとの邂逅は思いもかけないものであった。この年の 6 月，キリンブウェ村出身のニンドゥの青年が著者との接触を求め，大学の同僚のメール・アドレス宛に問い合わせをしてきた。1977 年の調査当時，10 歳の少

年であったというムソンブワ・イグンジ・ミッシェル（Musombwa Igunzi Michel）氏からのメールであった。

何人もの同僚にメールが送られてきたため，彼の切実さを感じて返信したのであったが，ニンドゥのエスノ・ボタニーに関する拙論（Yamada 1999）がウェブ上で公開されたことにより，著者の所在を知ることとなり接触を求めてきたものであった。1970 年代後半の調査を思い返すと，30 数年後の彼らとのインターネットをとおしたコミュニケーションは想像を越え，驚きであった。当時，ニンドゥのなかには，東アフリカの共通語であるスワヒリ語や，ベルギー領であったことからフランス語でのコミュニケーションは可能であったが，英語を解する人はほとんどいなかった。時の経過は英語による電子メールでのコミュニケーションが成立するのをみるまでとなっていたのである。

自分の村で調査をした研究者に関心をもち接触を求めてくるというのは珍しくはない話といえる。しかし，2010 年 6 月から 2020 年 9 月まで続いたニンドゥの男性とのメールのやりとりから彼らがコンゴ東部紛争により苦境に陥っていたことが判明した。このメールでの接触の背景にはもっと悲しい物語――彼らが直面した苦境――があった。

1977 年から 1978 年にかけての調査当時，旧ザイール共和国はモブツ大統領の政権が安定しており，村での生活も平和そのものであった。しかし，ルワンダの虐殺以降には，ニンドゥの暮らす土地はまさに国際紛争の渦中に巻き込まれ，キリンブウェ村の人々も村を離れざるを得なかったのである。ムソンブワ氏はメール・メッセージで次のように語る[12)]。

> 「今までの 15 年間はとても大変でした。武装集団に 3 度にわたり，家を焼かれました。全住民，私たちはときどき山の中やゾクウェ（Zokwe）川の対岸の遠くに，何ヶ月も隠れ住まなければなりませんでした。森の中での生活環境はとてもひどく，多くの大人や子どもたちが死にました。……　多くの人が虐殺でなくなりました。生きたまま埋められた人もいました。多くの悪いことが私たち民族に起こりました。カシカの王も，彼の一族すべてと共に 1998 年 8 月に殺されました。その結果，私たちの生活，大切なものは破壊され，ニンドゥ・コミュニティはこの混乱のなかから一層脆弱になってしまいました。私たちの言語も他の言語の影響によってほとんど消滅しかかっています。」

平和な村の生活が失われ，調査当時に世話になった家族も離散状態になったこと，難

民・避難民として暮らすなかで多くの人たちが亡くなったのであった。避難民生活においては他民族との共同生活を強いられてきたため，コンゴ東部の共通語であるスワヒリ語が日常語となり，ニンドゥ語を使うことも少なくなったという。とくに子どもたちの間で，伝統文化を学ぶ機会もなく，ニンドゥ語が使われなってしまい，民族としての文化のみならず民族語であるニンドゥ語の存続・維持が困難になったという。

約 30 年という時の経過による発展ばかりではなく民族として危機に瀕しているという事実に驚愕したと同時に，人類学者の記録が存亡の危機にある民族の文化再建の手助けになりうることをふたたび悟ったのである。研究者による調査報告や民族誌が文化復興や文化の再活性化に貢献することはこれまでのアイヌや東シベリアのサハの調査においても感じてきたし，グローバル化のなかで，伝統文化は消滅の過程を歩むのではなく，むしろ消滅の危機を感じるからこそ，伝統文化や言語の維持を図ろうとする動きが現われることを他の地域の事例からもみてきたところであった（Yamada & Irimoto 2011）。ニンドゥの間でもアイヌと同じような状況が起きていることで，言語が民族として，集団としての帰属意識の保持において重要な意味を持つことを再認識したのであった。

紛争終結後，キリンブウェ村には健康管理センター（Centre de sainté Kilimbwe）も建てられ，村に戻ったニンドゥは普通の生活を送れるようになったという。しかし，生計を営むなかで培われてきた伝統的知識や文化そのものを子どもたちに伝えることは難しくなり，伝統文化の消滅だけではなく，ニンドゥ語という民族語の消滅という危機意識を感じるまでになったという。第 3 節で詳しく取り上げるように，彼らは言語と文化の復興・再建にむけた活動に踏み出していったのであるが，ニンドゥ語の復興を図るために拙論（Yamada 1999）を言語資料として活用するとともに，調査中に撮影した写真資料をもとにかつての村の様子を子どもたちに伝えたいというのが著者との接触を図った大きな理由であった。次小節では，まず彼らが被った国際紛争の爪痕をたどってみる。

2.2　紛争に翻弄されるコンゴ東部

ザイール共和国成立後の 1965 年から 1966 年にかけても，ルインディ地方は金の闇採掘・取引のためにムレレ反乱軍に占領されていたことが知られ，当時，調査地キリンブウェ村のニンドゥはムレレの反乱軍を避けて，村を離れ山中に逃避行をしていたという。しかし，1994 年 4～7 月に起きたルワンダでの大虐殺は，その後にザイール東部への 85 万人（米川　2010: 37）ともいわれる大量のルワンダ難民の流入を引き起こして

ザイール共和国の一層の政治的不安定をもたらし，コンゴ東部地方は紛争に翻弄されていったのである。資料をもとに，とくに南キヴ州，ムウェンガ県，ルインディ地方などにおける惨劇の展開をみてみることにしたい。

1996 年 7 月にコンゴ・ザイール解放民主勢力連合による第 1 次コンゴ戦争が勃発すると，この年の 10 月 6 日には南キヴ州のスウェーデンのペンテコスタ派宣教拠点にあったレメラ病院[13]が襲撃され，患者や病院スタッフが惨殺される（ムクウェゲ＆オーケルンド 2019: 118; United Nations Human Right 2010: 75）。10 月 27 日にはカシカ－ムウェンガ間にあるキブンバ・キャンプでの難民の大量虐殺（Rever 2018: 42），10 月～11 月にかけてもムウェンガ県カミトゥガでの村民の虐殺（UNHR 2010）が起きる。

1997 年 5 月にはモブツ政権が倒され，国名はザイール共和国からコンゴ民主共和国に変更となり，1998 年 7 月に第 1 次コンゴ戦争の終結をみている（米川 2010: 31, 38-40, 158; United Nations Human Right 2010: 70, 75）。しかしコンゴ民主共和国としての再出発後も国内が安定することはなく，1998 年 7 月にはウガンダ軍，ルワンダ軍が侵攻し，「第 1 次アフリカ大戦」（第 2 次コンゴ戦争）が始まったのである。

1996 年の紛争発生以降，コンゴにおける紛争の犠牲者は 600 万人，難民・国内避難民は 400 万人に上ったといわれる。コンゴ東部地域においても，各地で非武装市民に対する虐殺事件が勃発していたことをアムネスティ・インターナショナルの 1998 年 11 月 23 日付ニュース[14]が伝えている。たとえば，①コンゴにおける戦闘を拡大させているすべての部隊は，非武装の市民に対して戦争を行っており，②南キヴ州のウヴィラとフィジの地元の青年たちが FAC（Forces armées congolaises，コンゴ人武装勢力）によって動員され，8 月 2-3 日の間に 250 人にも及ぶツチを殺害したことなどが公表される。さらに，2.3 で取り上げるカシカの虐殺についても，③RCD（コンゴ民主連合）[15]と彼らの同盟軍によって広範な非武装市民に対する人権侵害が行われ，8 月 24 日には RCD 戦闘員たちは南キヴ州のカシカのローマ・カトリック教区の周囲で，マイマイ武装集団による RCD とルワンダ政府軍の戦闘員約 50 人の殺害に対する報復として 850 人以上の非武装市民を虐殺したと公表する。

その後，2002 年 12 月に，暫定政府樹立を含めた和平協定が南アフリカのプレトリアで調印され（プレトリア包括和平合意），第 2 次コンゴ戦争は終結したとされる（澤田 2014: 79）。ただし，コンゴ東部では戦闘が継続し，武装勢力の数が減るどころか増加するあり様であり，2009 年のルワンダ政府軍とコンゴ政府軍によるルワンダ解放民主軍とウガンダ武装勢力に対する合同掃討作戦によって最終的な紛争の終結をみたとされ

る（華井　2019: 19）。

2.3　虐殺事件の犠牲となったニンドゥ――カシカの虐殺

2.1 で述べたムソンブワ氏のメール・メッセージに言及されていたように，ニンドゥも虐殺事件を免れることはできず，国際的にも「カシカの虐殺」として知られる惨劇に見舞われたのである。この事件は 1998 年 8 月 24 日に発生したが，ムウェンガ県ではさらに 1999 年 10 月に県庁所在地ムウェンガにおいても虐殺事件（ミシェル　2015）が起きていた。ここではメディアによって発信されてきた情報をもとに，ニンドゥに最も関わりの深いカシカの虐殺についてみてみよう。

まず，アムネスティ・インターナショナルが上述の 1998 年 11 月 23 日付ニュース[16]において公表するのをみることができる。これにより，①8 月 24 日に，RCD の戦闘員によって南キヴ州のカシカのローマ・カトリック教区において，伝統的首長をはじめ 850 人以上の市民が殺害された詳細，②RCD による約束にもかかわらず，カシカの虐殺に関する調査の実施については不明のままであることなどが明らかにされている。

国連人権委員会が発表した「mapping report 2010」（UNHR 2010）においても，1998 年 8 月 24 日の「カシカの虐殺」が詳しく報告される。RCD と彼らのルワンダの軍との同盟軍は南キヴ州の村々――カシカ，キルングトウェ，カラマなど――における多くの女性，子供たちを含む 1,000 人以上の市民を虐殺したことが国連によっても明らかにされている。

また，2010 年 5 月 27 日付の *Peace Insight* のブログ[17]において，F・カジングフ（Floribert Kazingufu）氏がカシカの虐殺についての小学校校長カコジ・ミレンゲ氏の回想を取り上げている：

> 「1994 年のルワンダでの大量虐殺の後，多くのフツの反政府勢力（インテラハムウェ）がカシカ近くの森に住むようになりました。1996 年，コンゴ民主共和国のツチ・ルワンダ軍は，同盟国のバニャムレンゲとともに，これらのフツ民兵を探し出し，攻撃し始めました。カシカの虐殺が行われたのはこのキャンペーン中でした。
>
> それは私たちの土地と私たちの人々の歴史を変えた暗い夜でした。私たちは，家族一同，宮廷のメンバーやカトリックのシスターや司祭を含む 100 人以上の人々と一緒に殺された伝統的な王ムワミ・フランソワ・ムベザ三世を見て，希望を失いました。私たちの部族では，そのようなことはこれまで起こりませんでした。大地の

心は悲しみに包まれました。その夜，バニャムレンゲの兵士たちは私たちの一番の敵になりました。. . . 」（下線は著者による）

さらに，カコジ・ミレンゲ氏の回想[18]は虐殺事件後にはニンドゥの間に部族内分断さえ起きたことを伝える：

「カシカの虐殺という悲劇の後，ムワミ・フランソワ・ムベザ三世の王座の継承をめぐって第 2 の衝突が起きました。部族の賢者たちが後継者はフランソワ氏の二人の従兄弟――シャル（Shalu）とニュンバ・ムゴマ（Nyumba Mugoma）――から選ぶべきだと決定しました。しかし，賢者たちが一人の後継者に同意できなかったため，恐ろしい争いが二人の後継者の間に発生しました。部族全体はそれぞれのイトコの支持者によって分かれ，二分されてしまったのです。……　ただ，人々の心に残った傷を取り去るために時が解決しただけです。」（下線は著者による）

この回想からニンドゥの人たちへの事件の衝撃を読み取ることができる。シャルとムゴマの間の対立が続き，「シャルは森で報復を仕掛け，彼の味方につくようにカシカの人々をリクルートしている」といわれ，多くの人たちは対立が暴力に発展することを恐れ，村を去り，どこか別の土地で暮らすのを選んだという。伝統的首長一族の殺害は，王国として部族，民族の統合・一体化が保たれてきたニンドゥにとって，新たな分断，分裂をもたらすことにもなっていったことが分かる。

2.4　紛争終結後のコンゴ東部地域とニンドゥ

2009 年の紛争の終結後も，コンゴ東部において暴力事件が継続して発生してきたことが知られる。コンゴでは 2018 年においても，1,598 件の暴力事件が起き，3,043 人が犠牲になっている（華井　2019: 18）。世界の紛争統計を集めた Armed Conflict Location and Event Deta（ACLED）は，2020 年においても南キヴ州だけでも 6 件の虐殺事件が発生し，最もひどい事件では 220 人の死者という大量虐殺が行われ，2022 年 5 月 1 日から 31 日の 1 ヶ月間に，南キヴ州では戦闘，市民への襲撃，暴動が計 37 件起き，20 人が亡くなった[19]ことを伝える。

その一方で，2010 年 5 月 27 日の *Peace Insight* のブログ[20]は，ルインディ地方における明るいニュースを伝える：

「カシカに滞在中，私はイブトゥワ《Ibutwa》という「兄弟同士」を意味する組織が活動していることを知りました。イブトゥワは最近「共同市場」を創りました。この共同市場が人々の間の緊張を助けてくれるのではと期待されます。二人のイトコたちの賛同者は今ではお互いに話し合うことさえみられます。・・・・このような努力がさらに進めば，カシカに平和が訪れるのに貢献するでしょう。」（下線は筆者による）

さらにその後には，カシカの虐殺に対する補償を求めるという市民社会運動も組織化されている。たとえば，22 年後の 2020 年には虐殺をめぐる否定的発言に対するニンドゥの抗議行動が行われる。2020 年 8 月 25 日の Actualite の記事をみると，「RDC：カシカの虐殺から 22 年，デニス・ムクウェゲ氏は補償を要求する」として，カシカ虐殺後の補償要求運動が取り上げられている[21)]。さらに 2020 年 9 月 4 日付の US News[22)]に掲載された記事にみるように，ヴィンセント・カレガルワンダ大使によるカシカの虐殺についてのルワンダの関与を否定する発言に対する抗議として，キンシャサのルワンダ大使館前での座り込みストライキの実施が計画された。ニンドゥが被った虐殺事件は彼らの心に深く刻まれ，今日では補償要求運動を展開するまでとなっているのである。

コンゴ東部地域は，金，銅，スズ，ダイヤモンド，コバルト，ウラニウム，タングステン，レアメタルのニオブ，マンガン，とくにコバルトは世界の産出量の 54% を占める（華井　2019: 18）という鉱物資源の豊富な産出地であり，このことがこの地域を国際紛争の渦中に巻き込んできたことが分かる。かつてのムレレの反乱当時には金の採掘と闇取引が要因となっていたが，第 2 次コンゴ戦争以降では，欧米の多国籍鉱山会社も巻き込んでのコルタン争奪戦（Rever 2018: 7-29）が背景となってきたのである。武装勢力や国軍などの紛争主体は，資金源として鉱物資源を利用し，とくに 2000 年代以降には，まとめて 3TG と呼ばれるスズ，タングステン，タンタルや金が利用されてきた。武装勢力が周辺地域の住民を支配するために村を襲撃して，略奪，殺害，性暴力を行うことには終結がみられない状況は今日まで続いている（ムクウェゲ＆オーケルンド 2019；華井 2019: 18-19）。

3　国際的《つながり》を糧に進む言語の再建

ニンドゥの青年からメール・メッセージをもらった 2010 年は，彼らが紛争終結後の

再建に向って新たな道を歩み始めたときであった。この年，キリンブウェ村出身のニンドゥの青年たちは，NPO 団体 Association pour la Survie de l'Héritage Culturel de Peuple Autochtone Nyindu（「先住民族ニンドゥの文化遺産存続協会」，以下 ASHPAN とする）を立ち上げている。彼らはこの NPO を母体にして，この地域の先住民族としてニンドゥの文化遺産存続――言語・文化の復興・再建――にむけた活動を開始していたのである。

NPO 団体 ASHPAN は活動を進めるにあたって，国際 NPO 団体とのつながりを築き，彼らから資金援助を獲得していったことが後で判明したが，著者とのつながり再開の背景には国際的 NPO 団体からの支援獲得という目的があったのである。彼らの国際的連繋をとおした言語・文化復興活動の展開と発展はどのように進んだのであろうか。その活動の軌跡を眺めてみることにする。

3.1　国際的危機言語・先住民族文化存続支援プロジェクトとの連繋

1990 年代以降，国連によって 1993 年の「世界の先住民族の国際年」（International Year of the World's Indigenous Peoples）宣言，続く 1995-2004 年の「世界の先住民族の国際 10 年」（International Decade of the World's Indigenous People），2005-2014 年の「第 2 次世界の先住民族の国際 10 年」（Second International Decade of the World's Indigenous People）の宣言が行われてきた。これにより世界各地で人権，環境，開発など先住民族社会が直面する諸問題の解決のための国際協力が育くまれ，先住民族運動が展開してきた。日本においてもアイヌの文化復興運動は大きく前進し，日本政府は 2007 年 9 月の国連総会における「先住民族の権利に関する国際連合宣言」の採択において賛成票を投じており，2008 年 6 月には第 169 回国会において「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議案」が全会一致で可決されている（山田 2019: 316）。

国連によるこれらの宣言を受けて，欧米を中心として先住民族の言語・文化を支援する団体が生まれている。ASHPAN がまず接触したのは，（1）Sorosoro プログラムであり，その後には，（2）国際 NPO「危機言語基金」（Endangered Language Fund, ELF），（3）国際 NPO「危機言語財団」（Foundation for Endangered Languages, FEL），（4）国際 NPO「文化の存続」（Cultural Survival）であった。彼らはとくに危機言語を支援する国際 NPO の助成金を受けて活動を進めてきたのである。以下で，彼らの活動の展開をみることにしたい。

3.1.1 Sorosoro プログラムへの申請

このプログラムは，2007 年 11 月に設立された言語保存世界機構（WOLACO Association, World Languages Conservancy）[23] が 2008 年 6 月にリヨン大学の Laboratory of Excellence ASLAN［LABEX ASLAN］（Advanced Studies on Language Complexity）の支援を受けて，危機言語の救済・保護のために開始した活動プログラムである[24]。プログラム名の Sorosoro は，ヴァヌアツの Araki 語で“息，話すこと（ことば），言語”を表す語彙であり，危機言語保護プログラムを象徴する言葉として選ばれた[25] という。

ASHPAN がまず着手したのは Sorosoro プログラムへのニンドゥ語の危機言語としての登録申請である。申請にあたって当該言語――ここでは Kinyindu（ニンドゥ語）――に関する所定の情報シートを作成し，送ることが求められている。情報シート作成にあたってはニンドゥ語に関する客観的資料が必要とされ，ASHPAN のメンバーはネット検索によって客観的資料を探すなかで，やっとのことで著者の論文（Yamada 1999）を見つけたのであった。

こうして 2.1 で述べたように，著者と接触を図ろうと同僚宛にメールを送り，山田の論文を参考資料とすることの了承と調査中に撮影した写真提供の依頼となったのである。33 年ぶりのメールによるこの邂逅に対し，写真と論文の別刷りを送付し，参考資料とすることの了承を伝えたのであった。これにより，ASHPAN は 2010 年 7 月 2 日にニンドゥ語を Sorosoro プログラムに危機言語として登録することができ[26]，Sorosoro プログラムのウェブページに掲載されるニンドゥ語の頁には，著者の撮影した写真 2 枚，送付した論文へのリンクが掲載されている。

ニンドゥ語については言語学的研究が少ないが，ベルギー領時代の言語学的・民族学的研究においてもバントゥ諸語の一つであることは知られてはいた。しかし，第 1 節で述べたように，バントゥ諸語の分類体系における位置が確定したのは近年のことである。湖間バントゥ語グループに属するとして言語学者の間で周知されることにより，2009 年に刊行された *Ethnologue: Languages of the World* 第 16 版（Lewis 2009）においても，初めて記載項目の民族語の一つとして取り上げられるに至っている。

バントゥ諸語研究の進展と，山田論文および 1970 年代の調査中に撮影した写真資料という客観的資料が NPO 団体 ASHPAN 自身のニンドゥとしての正統性の証明に貢献したということが分かる。これらの資料により ASHPAN は，ニンドゥが 1970 年代後半には一つの民族としてニンドゥ語を話し，伝統的な生活を営んでいたこと，そしてその彼らがルワンダの虐殺以降の紛争により民族としての言語・文化が消滅しかかってい

ることを，Sorosoro プログラム当事者に納得させることができ，プログラムへの登録が可能となったのである。

2010 年の Sorosoro プログラムにおける「危機言語」としての登録によって，ASHPAN はニンドゥ語の「危機言語」という位置づけを勝ち取ることができたといえる。その結果，3.1.2〜3.1.4 で述べるように，ASHPAN は，ルインディ地方の「先住民族」であるという帰属意識のもと，2020 年までの間に ELF, FEL, Cultural Survival と，危機言語・先住民文化を支援する国際 NPO の助成金を獲得し，活動の継続が可能となってきたのである。

3.1.2　国際 NPO「危機言語基金」（ELF）助成金による活動

ELF は，1996 年にニューヨーク市立大学の言語学教授ダグラス・ワーレン（Douglas Whalen）によってコネチカット州ニュー・ヘヴンを本拠として設立され，これまでに 60 カ国以上の危機言語に対して正書法や読み書き教材の確立のための活動などを援助してきた国際 NPO である[27)]。ASHPAN の代表である Michel Musombwa Igunzi は，南キヴ州ブカヴ市にある Pedagogical Superior Institute[28)]の Mazambi Wikaliza と共同で「危機言語ニンドゥ語の語彙データベース（Kinyindu Endangered Language Lexical Database）」作成計画を，ELF が実施する 2012 年度の「言語遺産助成金（Language Legacies Grant）」に申請したのである。

ASHPAN の申請計画は，14 件のプロジェクトの一つとして採択され，助成金を獲得することとなる。公表された 2012 年度の言語遺産助成金一覧をみると[29)]，彼らのプロジェクトの概要は次のように記される。

> 「2,000 人のニンドゥ語話者がいるとされるなかで，約 10% のニンドゥがニンドゥ語を流暢に話せるだけである。しかもこれらの話者の平均年齢は 40 歳であるが，コンゴ民主共和国の戦争に蹂躙された環境によって，現在の平均寿命はたったの 46 歳である。本プロジェクトは，言語を再活性化させるためにスワヒリ語とニンドゥ語との初めての二言語データベースを作成することを目的とする。これらの資料は，ことわざ集と動植物の語彙リストからなり，必要な教育資料の基礎となるものであり，教育用のブックレットとして地域の小学校に配る計画である。」（下線は著者による）

この助成金を受けて ASHPAN は，最初の活動として言語データベース，つまりスワヒリ語話者となってしまった子どもたちに向けたニンドゥ語の辞書づくりに取りかかったのである。そして，この取り組みをさらに継続して進めるために，次小節で取り上げるように，国際 NPO「危機言語財団」（Foundation for Endangered Languages, FEL）への接近を計り，更に活動を継続していった。

3.1.3　国際 NPO「危機言語財団」（FEL）とのつながりへ

国際 NPO「危機言語財団」（FEL）は 1996 年にイングランドとウェールズで，危機言語の記録，保護，促進を支援することを目的とする慈善団体 1070616 として登録された非営利団体である[30]。ニュースレター“*Iatiku: Newsletter of Foundation for Endangered Languages*”の第 1 号には，1994 年 11 月 27 日に英国出身の自主独立の言語学者であるニコラス・オストラ（Nicholas Ostler）によって団体設立が発案されたことが記されている[31]。

3.1.2 で述べた ELF のプロジェクトをさらに継続するため，ここでは ASHPAN のメンバーの Bamwiji Musombwa 個人の名前で FEL の 2014 年度助成金に申請したのである。申請プロジェクトは，“Kinyindu Endangered Language’s Proverbs Translation for the Nyindu Indigenous Young Generation”とし，先住民族ニンドゥの若年世代のためのニンドゥ語のことわざの翻訳に焦点が当てられており，採択をみることとなった。公表されている申請計画の概要[32]をみると，彼らがニンドゥ語を，コンゴ東部南キヴ州ムウェンガ県のルインディ地方農村に住む《Batwa（バトゥワ）起源のニンドゥ先住民族の危機言語》であると位置づけたことが分かる。この時点になると，ASHPAN は彼らがバトゥワという狩猟民族を起源とする先住民族――バトゥワ・ニンドゥ――であることを明示し，その上でニンドゥ語のことわざに詰まった先住民族ニンドゥの祖先の知恵をスワヒリ語とフランス語に翻訳し広めることが目的であると，プロジェクトの意義を主張していったのである。

ASHPAN は，引き続いての助成金受領のおかげで，スワヒリ語とフランス語への翻訳作業を完成させることができ，2014 年 10 月には「ニンドゥ先住民族のニンドゥ語ことわざ辞典（Banyindu Indigenous Proverbs Book in Kinyindu）」のスワヒリ語版，そしてフランス語版を完成させて出版したのである。これらの本はコミュニティ・メンバーと 8 つの学校に配布し，ニンドゥ先住民族の祖先の知恵と伝統的知識を広めることができたという。

3.1.4　国際 NPO「文化の存続」（Cultural Survival）とのつながりへの展開

バトゥワ起源の先住民族ニンドゥという帰属意識を確立した ASHPAN は，次には国際 NPO「文化の存続」（Cultural Survival）[33]に接触したのである。米国マサチューセッツ州ケンブリッジを拠点として活動するこの団体は，ハーバード大学名誉教授デイヴィッド・メイバリー・ルイス（David Henry Peter Maybury-Lewis）[34]と彼の妻によって 1972 年設立されたもので，先住民族の人権を擁護し，先住民族社会の自己決定権，文化，政治的回復力（レジリエンス）を支援することを目的に今日まで積極的に活動する。

彼らの支援プロジェクトは，2007 年 9 月 13 日の国連総会で採択された「先住民族の権利に関する国連宣言（the United Nations Declaration on the Rights of Indigenous Peoples, UNDRIP, 2007）」に示された権利を行使するための先住民族の草の根の活動を支援するものであることがうたわれ，プロジェクトの一つに「地球の守り手（地球番人）基金（Keepers of the Earth Fund, KOEF）」がある[35]。これはとくに，先住民族による文化的，政治的，経済的，社会的権利の履行と技術的支援の強化に向けた具体的なステップに踏み出すための助成金を提供するものであるとうたわれる。

ASHPAN は，2019 年度 KOEF プロジェクトとして，ニンドゥ語の慣用句・成句辞典の開発をテーマに，“Developing Kinyindu phrasal and idioms dictionary”を申請し，この基金を受賞したのである。この基金のホームページには，彼らの受賞理由が次のように公表される[36]。

> 「ムウェンガ県のバトゥワ・ニンドゥ（Batwa Nyindu）は，ニンドゥ語が消滅し，それに伴いニンドゥのアイデンティティも弱まっていくことを危惧している。ASHPAN はニンドゥ語のことわざ・慣用句などの先駆的辞書を作成してきた。また，ニンドゥ語の時間を告げる体系となるカレンダーを作成した。辞書の使用は，ニンドゥ文化への関心を高め，文化復興と包摂を促進するものとなる。ASHPAN はこの地域全体に彼らの使命とニンドゥの文化を促進するためにラジオの地方局とも連繋して活動する予定である。」（下線部は著者による）

ASHPAN はこのプロジェクトにおいても，自らをさらに明確にムウェンガ地区の先住民族であるバトゥワ・ニンドゥであると表明する。ニンドゥのなかでもバトゥワという狩猟民につながる先住民族であることを明示し，民族語であるニンドゥ語の危機的状況を地域全体に向けて訴えながら活動するというように，彼らの運動はバトゥワ・ニン

ドゥというエスニシティの明確な主張のもとに展開していったことが分かる。

3.2 国際的発信というさらなる活動の展開へ：ネット環境の積極的活用

以上でみてきたように，ASHPAN は彼ら自身の運動の展開にあたり，国際 NPO の助成金受領によって活動資金を獲得してきた。これらの支援をとおして，ニンドゥ語語彙データベース，ことわざ集，ニンドゥ語カレンダーなど，さまざまな言語資料の文書化，印刷物としての記録というように，民族語の再活性化を着実に発展させてきた。

彼らが KEOF プロジェクトで，《この地域全体に彼らの使命とニンドゥの文化を促進するためにラジオの地方局とも連繋して活動する》ことをうたっているように，彼らの運動はメディアやネット環境の積極的活用による他民族，他地域を対象とするニンドゥ文化の啓蒙活動へと，新たな展開をみせるようになっている。

実際，ネット環境を検索してみると，彼らが YouTube（ユーチューブ）を活用した国際的な動画発進をおこなってきたことが分かる。たとえば，2016 年には ASHPAN 代表の Musombwa Igunzi Michel は，動画“Kinyindu—Michel Musombwa Igunzi”を作成し，危機言語財団カナダ（FEL Canada）提供のユーチューブで情報発信を始めている[37]。FEL Canda は 2013 年の FEL オタワ会議に参加した人たちによって設立された FEL カナダ支部[38]であり，とくにカナダのファースト・ネーション，イヌイット，メティスの言語を強化する活動をしている団体であるが，このニンドゥ語についての動画を，「コンゴ民主共和国において約 8,400 人の話者をもつバントゥ語である」という説明付で配信する。さらに FEL Canada は別の動画“Nyindu Batwa”[39]をもユーチューブで発信する。

ネット検索をすると，ニンドゥに関するユーチューブを活用する情報発信は ASHPAN のみに限らず，他の人たちが製作したものもみられるようになっている。たとえば，ユーチューブ上に，“Speaking Kinyindu, an endangered language of the Democratic Republic of Congo（DRC）”[40]や“Nyindu DR Congo”[41]を見つけることができる。ニンドゥの人たちの間で積極的なユーチューブ活用が広まっていることが分かる。

こうした社会動向を反映したものと考えられるが，ASHPAN は UNESCO の 2020 年度の International Fund for Cultural Diversity（IFCD）[42]に応募している。彼らの申請計画“Projet de renforcement des capacité des productuers culturels au sein des communauté autochtones Twa de la region du Kivu en République Démocratique du Congo”（コンゴ民主共和国，キヴ州内の Twa 先住民族社会における文化的映像制作能力強化計画）は採択

されはしなかったが，コンゴ民主共和国政府からの推薦も受け，最終選考まで残っていた[43)]。申請計画書をみると，計画の貢献可能地域としてブルンディ，ルワンダが言及されており，ASHPAN の言語再建運動は先住民族バトゥワ・ニンドゥとして，コンゴ東部，ブルンディ，ルワンダに居住する他のバトゥワ（ピグミー）系民族とも連帯する運動へと展開し始めたことが分かる。

お　わ　り　に

コンゴ東部地域には，「先住民族」としていわゆるピグミー系のバトゥワが居住するなかで，他の地域からの民族が入り込み，混住していったという入り組んだ民族移動の歴史がある。以上で述べてきたように，ニンドゥ王国も例外ではなく，ルワンダからのツチ系集団が移住して支配集団として先住のバトゥワ集団やバレガ集団を支配していった歴史をもつ。また，第 2 節で述べたようにコンゴ戦争が継続するなかで，村を追われ離散生活を余儀なくされたニンドゥも少なくない。しかもカシカの虐殺事件における王家一族の虐殺は，その後の混乱にみるように，かつて王国として統合されていたニンドゥ地方の社会的・政治的一体化を難しくさせてきたことが分かる。

調査地として訪れたキリンブウェ村の人たちもまた長期間にわたる避難生活を経験していたが，停戦協定成立後の 2010 年には村に戻ることができ，コミュニティの再建に踏み出すことができたのであった。彼らは第 3 節で述べたように，コミュニティの再建にあたって民族としての言語・文化遺産の重要性に気づき，NPO 団体 ASHPAN を設立し，国際 NPO の支援を受けながらその再建・再活性化をめざして活動してきた。さまざまな言語資料の文書化，印刷物としての記録といった資金援助を受けて可能となった活動は，民族語であるニンドゥ語の再活性化にとどまらず，ことわざなどに詰まった民族の伝統的智慧――ニンドゥの精神文化――を文化遺産として残す取り組みでもあった。

彼らは民族としての精神文化を中核に据えたコミュニティ再建を進めてきたのである。本事例は，コミュニティの再建あるいは構築にあたっては，その成員間での言語や精神文化の共有・保持が必須となることを示すものといえる。同時に，彼らの取り組みが国際 NPO の支援のもとに進んできたことは，国家の枠組みを超えた国際的支援が現代の先住民族運動を円滑に進める原動力になっていることを表すといえよう。先住民族にとっても運動の成否はいかに国際的評価を受けることができるかにかかっていることが分かる。

ところで，ASHPAN がニンドゥの言語と文化の復興運動を進め，民族意識の再活性化を図るなかで，彼らはこの地域（コンゴ東部，ルインディ地方）の「先住民族」であるという帰属意識を掲げてきた。しかも彼らの活動の展開には，自らの民族性を「ニンドゥであること」に留めるのではなく，さらにはコンゴ東部地方の先住民族――バトゥワ――という位置づけと一体化させたバトゥワ・ニンドゥ（Batwa Nyindu）として自己再定置してきたことを読み取ることができる。

ASHPAN にみる帰属意識のこのような自己再定置は，虐殺事件を契機におきたニンドゥ王国としての瓦解に呼応して生まれた，キリンブウェ村住民の小領主国としてまとまっていたという彼らのミクロヒストリーの再確認に立ち返った主張ということができよう。と同時に，この自己再定置は国際的先住民族運動との応答を進め，欧米社会が主導する先住民族支援活動とのつながりをより円滑にさせるという戦略的意味をもちうるものであったといえよう。とくにコンゴ東部地域の多数派諸集団に対して人口も少ない極少集団にすぎないニンドゥであり，しかもそのなかの一つにすぎないキリンブウェ村の人々にとって，集団としての生き残りの戦略は国際的に「先住性」あるいは「先住民族」であることを訴え，コンゴ民主共和国を越え広くアフリカ東部のバトゥワと連帯することにあるということもできる。

ただし，後からヨーロッパ人が移住していった歴史をもつ北米，南米やオーストラリアのように，先住民族と移住者とがはっきりと区別できる地域とは異なり，歴史史料を古く辿ることが難しいコンゴ東部においては，キリンブウェ村のニンドゥが「先住民族バトゥワ」であるという主張を他の民族に納得させるのは，実際にはなかなか難しいともいえる。ムソンブワ氏がベルギー領時代のアーカイブをもとにニンドゥの歴史を明らかにしたいという願望をメール・メッセージで述べていた。そこには彼らが他の民族を納得させうる「先住民族」としての証を必要とする現状にあることが読み取れるが，彼らは先住民族バトゥワとしての歴史の解明をも視野に入れながら次の段階へと進み出したのである。

本稿では，コンゴ東部のルインディ地方に暮らすニンドゥが紛争終結後に ASHPAN を設立し，国際的「つながり」を軸に，自らを先住民族バトゥワにつながるものとして自己再定置して母語の再建・保存活動を進めてきた過程を明らかにしてきた。本事例は，民族性の自己再定置とともに，その証となる民族語と民族としての精神性の共有・保持が多民族国家に生きる集団にとって必要不可欠であることを示すものであり，現代社会におけるコミュニティ維持を考える上でも示唆的といえよう。

注

1）福田充，2022 年 4 月 15 日付毎日新聞記事，「ウクライナ侵攻，スマホで見る現代戦の本質」。

2）1934 年に協議会の名称は“l'Église du Christ au Congo”に改称される。“Église du Christ au Congo”―Wikipédia, at〈https://fr.wikipedia.org/wiki/Église_du_Christ_au_Congo〉（last accessed on 2023/5/6）.

3）1958 年にベルギー領コンゴでの宣教活動を開始し，1964 年のコンゴ動乱では 3 人の神父が殉教。“Africa, Xaverian Missionaries USA”, at〈https://www.xaverianmissionaries.org/where-we-are/africa/〉（last accessed on 2021/1/11）.

4）エスノローグ（Ethnologue: Languages of the World）はキリスト教系の少数言語の研究団体国際 SIL の公開ウェブサイトおよび出版物。SIL は聖書翻訳で知られる。

5）民族名を接頭辞“Ba”をつけて複数形表現とすることも一般的。Nyindu に対し Banyindu, Twa に対し Batwa, Shi に対し Bashi など。

6）カトリックの Missions d'Afrique の宣教師，R. P. Colle（Révérend Père Colle，コール神父）。

7）Bushi は Bashi の国，彼らが暮らすテリトリーあるいは王国という意味。

8）Banyintu はニンドゥの古いローマ字表記。

9）デニス・ムクウェゲ氏の出身部族（ムクウェゲ＆オーケルンド　2019: 61）。

10）1978 年 2 月 17 日フィールドノート（FN_1978. 02. 17）。

11）1978 年 2 月 22 日フィールドノート（FN_1978. 02. 22）。

12）2010 年 7 月 16 日付　Musombwa 氏からの電子メール・メッセージ。

13）当時この病院の医師であったデニス・ムクウェゲ氏は，間一髪で難を逃れたことが知られている（ムクウェゲ＆オーケルンド　2019: 118）。

14）Amnesty International, News, Service: 225/98［AI INDEX: AFR 62/38/98, News: EMBARGOED UNTIL 1400 GMT 23 NOVEMBER 1998,“Great Lakes: Thousands of civilians victims of atrocities in the DRC”at〈https://www.amnesty.orgafr620381998en〉（last accessed on 2022/11/11）;“Thousands of civilians victims of atrocities in the DRC”at〈https://reliefweb.int/report/democratic-republic-congo/thousands-civilians-victims-atrocities-drc〉（last accessed on 2022/12/20）].

15）1998 年の第 2 次コンゴ戦争で結成された反政府勢力，Rassemblement conglais pour la démocratie（Congolese Rally for Democracy）.

16）Amnesty International, News, Service: 225/98, *ibid*.

17）Floribert Kazingufu,“Two conflicts, one village: The case of Kasika”, Peace Insight, 27th May, 2010, Articles Blog, at〈https://www.peaceinsight.org/en/articles/two-conflicts-one-village-the-case-of-kasika/?location=dr-congo&theme=〉（last accessed on 2021/1/17）.

18）Floribert Kazingufu,“Two conflicts, one village: The case of Kasika”, *ibid.*

19）ACLED（Armed Conflict Location and Event Data）, at〈https://acleddata.com/dashboard/#/

dashboard〉（last accessed on 2022/6/1）.

20）Floribert Kazingufu, “Two conflicts, one village: The case of Kasika”, *ibid.*

21）Justin Mwamba, “RDC：22 ans après le massacre de Kasika, Denis Mukwege réclame réparation pour les victimes”, Actualite.cd., at〈https://actualite.cd/2020/08/25/rdc-22-ans-apres-le-massacre-de-kasika-denis-mukwege-reclame-reparation-pour-les〉（last accessed on 2021/1/7）.

22）“US News：DRC: 22 years after the massacre, return to Kasika where the wounds of the mass graves remain alive”, 04 September 2020, Source: rfi.fr, at〈https://pressfrom.info/uk/news/world / us-news / -473137-drc-22-years-after-the-massacre-return-to-kasika-where-the-wounds-of-the-mass-graves-remain-alive〉（last accessed on 2021/1/7）.

23）WOLACO（Conservatoire International des Langues）は，パリに本部がある NPO 団体で，2007 年 11 月 1 日の設立，登録。危機言語の保存・発展のための教育用・広報用映画の制作を目的とする文化団体。AT〈https://www.societe.com/societe/world-languages-conservancy-conservatoire-international-des-langues-799997465.html〉（last accessed on 2022/11/29）.

24）“The Sorosoro in the media”, at〈http://www.sorosoro.org/dans-les-medias/〉（last accessed on 2021/1/19）.

25）“The Sorosoro program”, at〈http://www.sorosoro.org/en/the-sorosoro-programme/〉（last accessed on 2021/1/19）.

26）“Le kinyindu”, at〈http://www.sorosoro.org/kinyindu/〉（last accessed on 2021/1/18）.

27）“The Endangered Language Fund（ELF）”, at〈http://www.endangeredlanguagefund.org/about-elf.html〉（last accessed on 2021/1/17）

28）Pedagogical Institute of Bukave［Institut Supérieur Pédagogique de Bukavu（ISP/Bukavu）］, at〈https://www.unipage.net/en/24672/pedagogical_institute_of_bukavu〉（last accessed on 2022/11/30）.

29）“NPO Endangered Language Fund”, at〈http://www.endangeredlanguagefund.org）/〉（last accessed on 2021/1/17）；“Language Legacies Grant Recipients-2012”, at〈http://www.endangeredlanguagefund.org/ll_2012.html〉（last accessed on 2021/1/6）.

30）Wikipedia.pdf, “Foundation for Endangered Languages”, at〈https://en.wikipedia.org/w/index.php?title = Foundation_for_Endangered_Languages&oldid = 1011362255〉（last accessed on 2022/11/26）.

31）*Iatiku,* at〈chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/http://www.ogmios.org/ogmios/Iatiku_01.pdf〉（last accessed on 2023/1/13）；Wikipedia “Nicholas Ostler”, at〈https://en.wikipedia.org/w/index.php?title = Nicholas_Ostler&oldid = 1114427208〉（last accessed on 2022/11/30）.

32）“supported grants 2014, FEL Grants: Supported projects”, at〈http://www.ogmios.org/grants/reports/index.php?region = Africa〉（last accessed on 2023/1/13）.

33）“Culture Survival”, at〈https://www.culturalsurvival.org〉（last accessed on 2021/1/17）.

34）David Henry Peter Maybury-Lewis は，英国の人類学者，南アメリカ，アマゾン低地の民族を研究した民族学者，先住民の人権活動家，ハーバード大学の名誉教授，1929 年～2007 年。Wikipedia“David Maybury-Lewis”, at〈https://en.wikipedia.org/w/index.php?title=David_Maybury-Lewis&oldid=1110786711〉（last accessed on 2022/11/26）.

35）“KOEF”, at〈https://www.culturalsurvival.org/programs/advocacy/koef〉（last accessed on 2020/12/20）.

36）“Keepers of the Earth Fund Awards 30 Grants, March 6, 2019”, at〈https://www.culturalsurvival.org/news/keepers-earth-fund-awards-30-grants〉（last accessed on 2021/1/17）.

37）“Kinyindu—Michel Musombwa Igunzi” by FEL Canada, at〈https://www.youtube.com/watch?v=Zs1qqx7xYcA&list=PLHPBEdxyVQ4--Bb4Aby6MPIsESfFBxGuN&index=1&t=5s〉（last accessed on 2021/1/23）；Uploaded on 2016/4/4［387 回 視 聴　2016/4/4］；Kinyindu is a Bantu language in the Democratic Republic of the Congo spoken by approximately 8,400 Wanyindu people.

38）FEL Canada, at〈https://www.felcanada.org/〉（last accessed on 2023/1/19）.

39）“Nyindu Batwa” by FEL Canada, uploaded at 2016/3/30, at〈https://www.youtube.com/watch?v=RXGGfnOFrpw〉（last accessed on 2021/1/23）.

40）“Speaking Kinyindu, an endangered language of the Democratic Republic of Congo（DRC）” by The Pirate Professor, at〈https://www.youtube.com/watch?v=9vNAAsO_Bjw&list=PLHPBEdxyVQ4--Bb4Aby6MPIsESfFBxGuN&index=3&t=2s〉（last accessed on 2021/1/23）；Uploaded on 2020/10/6, 120 times; Kyungulira providing data aimed at documenting Banyindu Indigenous generational map. Association for the Survival of the Cultural Heritage of the Nyindu Indigenous People（ASHPAN）.

41）“Nyindu DR Congo”, at〈https://www.youtube.com/watch?v=Bmrw7aam7x8〉（last accessed on 2021/1/23）.

42）これは，Article 18 of the 2005 Convention on the Protection and Promotion of the Diversity of Cultural Expressions によって設立されたユネスコの多国籍ドナー基金［“What is the IFCD?”, at〈https://www.unesco.org/creativity/en/ifcd/what-ifcd〉（last accessed on 2021/1/19）］.

43）“IFCD Results of the last cycle”, at〈https://es.unesco.org/creativity/fidc/presentar-solicitud/resultados?field_fund_type_value_selective=All&field_ifcd_pp_applicant_type_tid=All&field_ifdc%E2%80%A6〉（last accessed on 2021/1/19）.

参考文献

Biebuyck, Daniel（1973）*Lega Culture: Art, Initiation, and Moral Philosophy among a Central African People,* Berkeley & Los Angeles: University of California Press.

Colle, Père Pierre（1922）“Les clans au pays des Bashi（Banyabungu）”, *Congo, revue générale*

de la Colonie belge, Vol.III, Tome I, pp.337-352［Digital Collections, George A. Smathers Libraries, University of Florida, at〈https://ufdc.ufl.edu/AA00002606/00001/1x〉last accessed on 2021/1/21］.

――――（1937［1971］）*Essai de monographie des Bashi.* Bruxelles: Ronéo［2nd édition, 1971, Bukavu: Centre d'Étude de Langues Africaines］.

Guthrie, M.（1948）*The Classification of the Bantu Languages,* London: Oxford University Press.

――――（1967-71）*Comparative Bantu: an introduction to the comparative linguistics and prehistory of the Bantu languages,* 4 vols, Farnborough: Gregg.

Lewis, M. Paul（ed.）（2009）*Ethnologue, Languages of the World.* 16th edition, Dallas: SIL International.

Maho, Jouni（2003）"31 A Classification of the Bantu Languages: an updated of Guthrie's referential system", in: Nurse, Derek & Gérard Philippson（eds.）, *The Bantu Languages,* London & New York: Routledge, pp.639-651.

Moeller, A.（1936）*Les grand lignes de migrations des Bantous de la province orientale du Congo Belge. Mémoire de l'Institut royal colonial Berge, Collection in 8"*, Tome VI, Bruxelles: Georges van Campenhout. A.R.S.O.M.（R.A.O.S）［Royal Academy for Overseas Sciences］, at〈https://www.kaowarsom.be/en/memoir_18〉（last accessed and downloaded on 2022/4/28）.

Nurse, Derek（1994-95）"'Historical' classifications of the Bantu languages", *Azania: Archaeological Research in Africa,* 29-30（1）: 65-81.

Rever, Judi（2018）*In Praise of Blood—The Crimes of the Rwandan Patriotic Front,* Toronto: Random House Canada.

United Nations Human Right（UNHR）（2010）*UN Mapping Report 2010, DEMOCRATIC REPUBLIC OF THE CONGO, 1993-2003,* Unofficial translation from French original, UNHR, at〈chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.ohchr.org/sites/default/files/Documents/Countries/CD/DRC_MAPPING_REPORT_FINAL_EN.pdf〉（last accessed on 2021/1/9）.

van Bulck, S.J.（1948）*Les recherches linguistiques du Congo.* Mémoires de la Classe des Sciences Morales et Politiques, IRCB. T. XVI: 767（in-8°）, Bruxelles : L'Inst. Royal Colonial Berge［at〈https://www.kaowarsom.be/en/memoir 40〉（last accessed on 2021/1/15）］.

――――（1954）*Orthographie des noms ethniques au Congo Berge.* Memoires- Collection in-8°, Tome XXVIII, fasc. 2, Section des Sciences morales et politiques, Bruxelles : Institute Royal Colonial Berge［at〈https://www.kaowarsom.be/ Hum.Sc.（IRCB）_T.XXVIII,2_VAN BULCK R. P. G._Orthographie des noms ethniques au Congo Belge_1954_PDF〉（last accessed on 2021/1/19）］.

Vansina, J.（1965）*Introduction à l'ethnopgraphie du Congo.* Universitaire du Congo.

――――（1995）"New Linguistic Evidence and 'the Bantu Expansion'", *The Journal of African History,* 36（2）: 173-195.

Yamada, Takako（1984）“Nyindu Culture and the Plant World: The Dynamic Relationship Between the Knowledge on Plant Use and the Change in House Form”, *Senri Ethnological Studies,* No.15（Africa 3）: 69-107.

————（1999）“A Report on the Ethnobotany of the Nyindu in the Eastern Part of the Former Zaire”, *African Study Monographs* 20（1）: 1-72.

————（2011a）“Self-Reorienting of Tibetan Refugees in Host Societies via Religion, Multiple Identities and Connectedness with Place of Origin”, Paper presented at 110th Annual Meeting of AAA, Montreal, QC, Canada, Nov. 16-20, 2011.

————（2011b）“Session 6-0375: ‘Reorienting Endangered Selves in the Multi-Cultural /Ethnic Landscape: Cultural Legacies, Religion and History’”, In: Traces, Tidemarks and Legacies, 110 th Annual Meeting, Montréal, QC, Canada, November 16-20, 2011, Abstracts, American Anthropological Association, 2011, p.184［Held on November 20, 2011］.

Yamada, Takako & Takashi Irimoto（2011）*Continuity, Symbiosis, and the Mind in Traditional Cultures of Modern Societies,* Sapporo: Hokkaido University Press.

王柳蘭・山田孝子（2023）「序章　越境者の生をめぐる動態とミクロヒストリーの視角」王柳蘭・山田孝子（編），『ミクロヒストリーから読む越境の動態』東京：国際書院，15-32 頁。

華井和代（2019）「コンゴ民主共和国における紛争資源問題の現状と課題」『国際問題』682: 18-28。

ムクウェゲ，デニ，ベッテル・オーケルンド（2019）『すべては救済のために　デニ・ムクウェゲ自伝』加藤かおり（訳），東京：あすなろ書房。

ミシェル，ティエリー（監督）（2015）『女を修理する男』（DVD），製作・ベルギー，作家：コレット・ブラックマン，シエリー・ミシェル，脚本：ティエリー・ミシェル，コレット・ブラックマン，クリスティーン・ピロ，字幕：八角幸雄，監修：米川正子，総括：コンゴの性暴力と紛争を考える会，配給：ユナイテッドピープル。

澤田昌人（2014）「コンゴ民主共和国における武装勢力掃討は成功するか？――対 ADF 作戦の難しさ」『アフリカレポート』52: 78-87。

山田孝子（1984）「第 15 章　ニンドゥ族の住居と植物の世界」伊谷純一郎・米山俊直（編），『アフリカ文化の研究』京都：アカデミア出版会，621-670 頁。

山田孝子（2015）「ホスト社会における難民の自己再定置と共同性再構築・維持――トロント・チベット人社会の事例から」『金沢星稜大学人間科学研究』9（1）：83-90。

山田孝子（2019）『アイヌの世界観』東京：講談社（講談社学術文庫）。

米川正子（2010）『世界最悪の紛争「コンゴ」――平和以外に何でもある国』東京：創成社（創成社新書）。

（第 21 期第 17 研究会による成果）